

平成 21 年 1 月 15 日発行

# しのはらの風 20-9号

小淵沢町篠原区情報紙  
発行人; 区長 松井 皎  
編集; 藤代 富美男

## <新年明けましておめでとうございます>

区民の皆様、新年明けましておめでとうございます。

元旦は見事に晴れ上がり初日の出を拝んだ方も多かったと思います。新年の幕開けにはふさわしい朝でした。

年末から正月にかけてのニュースは明るい話題は少なかったようでしたが、ここ篠原区では前向きに、住みやすい環境づくりや助け合いのできる地域づくりに励んで生きたいと思います。区長をはじめとして区役員が一丸となって活動していく心算ですので皆様も一緒にご協力をお願いします。

今年 1 年が皆様にとっておだやかで良い年でありますようにお祈りします。

(篠原区長及び区役員一同)

## <道路の滑り止めについて>

道路が凍りつく季節になりました。区民の皆さんは凍った道路には慣れていると思いますが、それでも事故はつきものです。危険な道路がありましたらお気づきの人は恐れ入りますが公民館の入口に融雪剤が置いてありますので撒いてください。

~~~~~

### 篠原区の活動に女性の視点と力を！！

(話し合いの集いご案内)

小淵沢のどの区にもあった「婦人部」がなくなり、他の区では「生活部」をつくり活動しています。私たち篠原でも少子高齢化と超核家族化がすすんでいます。そのための取り組みが思うように出来ていません。それだけに、地域づくりは男性だけでなく女性の視点、その力・パワーがどうしても必要です。つきましては、次の日程により、こうした活動のあり方について、みなさんと話し合いをしたいと思いますので、ぜひ、ご出席願います。

日時 1月30日(金) ごご 7時30分～  
会場 篠原公民館

少しでも関心をお持ちの方、ご意見をお持ちの方、ご参加よろしくお願いたします。

## <篠原に新しい命>

昨年の12月23日、3組の田代浩司さんに第4子で長男が誕生しました。

篠原で新しい命が生まれるなんて素晴らしいですね。お母さん頑張りましたね。

お父さんは男の子とキャッチボールやプロレスをしなければと早速ジョギングを始めて体力をつけているそうです。お姉さん達3人も大喜び。

名前は大翔（ひろと）ちゃんです。皆さんよろしくお願ひします。

## <初夢>

〇×年元旦、何故か誰もいない篠原神社の前で、ひとり挨拶をしている。

「さまざまな機会をとらえて行った区への加入促進の取り組みにより、加入率は90%を超えました。しかし、これだけの区民をかかえながら区の組織は……」  
……気がつく、そこは役員会のようだ。

「もうこれ以上、分館活動の予算はいりませんよ。活動も十分やっていますから」とか、「昔の組活動費の復活はないでしょう」など、そして「だからといって、いまの1,000円区費を下げるのはいかがなものか」……どうやら、予算の使い道に困っている様子だ。……目の前に民生児童委員が立って何やら話をしているようだ。

「届けられた区費の減免者リストを確認した。最近の景気回復をうけて減免の対象者が半減している。今年はいいい年になりそうだ」といいながら、一枚の紙をさしだした。

突然、電話のベルで目が覚めた。どうやら夢を見ていたようだ。

「区長、まだ寝ていたのですか。今日は元旦祭ですよ。子どもに渡すお菓子どうなっているのですか。はやく来てください」と、藤代副区長の声だ。ああもう少し寝ていたい。

最後になりましたが、あと一年。本年もよろしくお願ひいたします。

(区長 松井 皎)

## <身近な散歩道>

前号で「八反歩堰」を紹介しましたが如何だったでしょうか。今回は「県営牧場と女取湧水」を紹介します。

サントリーとゴルフ場の間を通過して棒道に出ます。この道に枯葉がうす高く積もってカサコソと気持ちのいい音を立てます。棒道を西にしばらく進むと右に入る小道がありそこが県営牧場の入口です。夏ならば草をかき分けて進むのですが、今は雪を踏

みしめて黒々とした木々の枝を眺めながら進みます。行く先に目を凝らしながら進んでみてください。運がよければ白い雪の上を黒いシルエットの鹿が十数頭も跳ねて道を横切ります。こんな身近なところでの驚きです。

舗装道路になって東に進むと広々とした牧草地越しに北はハヶ岳、南は南アルプスの山々が一望できます。そのまままっすぐ進むと小さな看板があり女取湧水とかがかかれています。看板どおりに進んではいけません。南に下ります。すると右手に「日本の名水 100 選」に選ばれた女取湧水があります。ここで喉を潤して南に下って行き、棒道に出て道沿いに沢を眺めたりして、白樺平の別荘地裏を通してサントリーとゴルフ場の間の道に戻ります。ざっと 2 時間ほどの行程です。一度歩いてみては如何でしょうか。

### <開拓の思い出>

今回は「十、電気導入」と「十一、生産」です。

都会生活者が慣れない農業に取り組み、ましてや開墾しながらという大変な苦勞が文章の随所に滲み出ています。現在何気なく使っている電気も大変な思いをして使えるようになったのですね。

句読点、文字遣い等そのまま。

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |        |       |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|-------|
| 「開拓の思い出」                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 十、電気導入 | 志村 卓爾 |
| 電気も無いランプ生活も何年か続く、戦前都会生活をして来た我々に電気の無い生活は大変だった。電気導入も近村の小泉村小荒間が近かったこともあり昭和二十二年頃より工事が始まる。開拓地としては電気導入は早かった。当時電柱も確保することが困難な時代でした。そこで電柱に使用する、カラ松の木をハツ岳の鐘かけの松の上から男子全員出役で一本の電柱材木十四名ぐらいで担ぎ一日に一本の割当て担ぎ出す、方の皮がむけて赤くはれ上がる。それでも又明日の作業がある。何日もかかった電柱用の材木を担ぎおろし、電柱の確保も出来、電気導入が完成しラジオを聞くことの出来た時の喜び。ランプの掃除も無くなる。地域の中、すべてが明るくなる。其の後、分散家庭へ電気導入が始まり、電気導入組合を設立（組合長に名倉常次郎さん）、導入費用に穀物（トウモロコシ）一俵宛出し合って費用に当てるなど苦勞が良く続く。分散家庭にも電気導入が出来組合全体が明るい、笑い声が聞える時が来た。 |        |       |

|                                                                                                                     |       |       |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|-------|
| 「開拓の思い出」                                                                                                            | 十一、生産 | 志村 卓爾 |
| 都会で生活していた我々は作物を栽培することの技術の困難さ、蒔付すれば芽生え植付すれば育ち実るものと簡単に思っていた。実際とは大違い。当時県より、開拓営農指導員として、篠尾村根造より篠原へ毎日脚絆姿で現地指導に来られた、坂本文雄指導 |       |       |

員さんには最初より農業指導を受け、特に大豆、ラッカセイ等々の摘品種栽培、馬鈴薯の種いもの切り方植付等、手取り足とり指導を受けたことなど、一人前の農業者育成に役立てられ、皆喜びと同時に感謝申し上げます。一生わすれません。

開墾も進み生産も、粟、トウモロコシ、大小豆、大小麦、種馬鈴薯、陸稲、野菜、大根の生産が一時期盛かんになり大根工場も現地に出来、大量の生産出荷もした。現地に工場の無かった時は小淵沢迄悪路を牛車で出荷した。年を重ねるにつれて現金収入の多い特殊作物の生産に移行する様になる。葉たばこ、きゃべつ、トマト、インゲン。

種馬鈴薯等で、地力増進には堆肥が必要になり改良和牛の導入、第三組に最初、乳牛が導入され其の後昭和二十九年度よりハツ岳南麓が酪農振興指定地域になり、最初オーストラリアから、ジャージー種の乳牛が導入され、バター、チーズ等の生産に力を入れる、態勢になり雪印乳業会社と農協とが合併会社を設立、ハツ岳酪農協同組合を発足。ほとんどの農家が乳牛を導入。酪農と野菜の生産地に取りくむ。

耕地も肥沃くになり生産も増して来た。特に種馬鈴薯は北海道産以上の良質の折り紙のつく種薯が小淵沢の特産物の代表的作物になる。生産する過程は横浜の植物防疫所より厳しい検査を受け良質の種馬鈴薯が出来、作付面積も増え良い成績で出荷。集荷所も県の補助を受け建設当時は利用度も多かった。ジャージー乳牛は脂肪は七%と高かったが量的には少なく乳業会社の要望により、ホル(ス)タイン種の乳牛に全部更新してしまった。飼料の確保で牧草地の拡大も冬期間の粗飼料給与にトウモロコシのサイレジー作りの詰込作業が又大変で近所の仲間達が手伝い合って、一基詰めるのに八人の人達が必要でお祭さわぎみたいな賑やかな作業で苦勞の作業でもあったが又楽しかった。其のうちに他産業が農家の若者を必要になり農業より安定している職業の会社に務める者が多くなる。後けい者の他産業への転出、農家も専業が次第に少なくなる。

当地区は標高千米の位置にあり冬期は寒さ厳しく又春から夏には空気が乾燥していて爽やかな気候で、都会から移住して定住する人達が年毎に多くなり第二の軽井沢になる様な言葉も聞く様になる。自然も沢山あり見廻すと美しい高い山々、富士山も良く見える展望の良い所、毎年ペンションも増える。入植当時の方々も住みなれた東京、大阪等へ新天地を求めて去る思い出は尚多く又他界なされた先輩の苦勞があって此の地域が現在有ること今更ながら痛感する。後世代に此のことを伝える務めがあるのではないかと思う。

近年葎崎、明野、須玉、高根、長坂、大泉、白州などでリンゴ栽培が可能になり長野県伊那、飯田地方より早期出荷が出来るので、県でもハツ岳南麓にリンゴの産地を造るべく小淵沢にも展示園を二ヶ所造り良い成績を上げている。篠原地域は標高を利用し日持ちの良い品が生産出来ることに一応見通しが出来、普及事務所でも品種選びに力を入れてくれる。現在観光客にも別荘の方々にも人気が高まって来ている。小淵沢でリンゴ取れる。